

同志社大学文化情報学部蔵『百人一首かるた』(歌意絵入り)四種―影印・翻字と考察(二)―

福田 智子・大久保 孝晃・伍 昆・胡 淑雲

本稿は、同志社大学文化情報学部が所蔵する江戸時代に制作された『百人一首かるた』のうち、歌意絵入りかるた四種について、札の影印を掲載するとともに、翻字と、古注釈を参看した歌意絵の図柄に関する比較考察を行うものである。今回は、『百人一首』七番から一一番までの札を取り上げる。

本稿は、「同志社大学文化情報学部蔵『百人一首かるた』(歌意絵入り)四種―影印・翻字と考察(二)―」(『文化情報学』第十四巻第一号、二〇一八年十一月)に引き続き、歌意絵入り『百人一首かるた』四種について、古注釈を参看しながら、歌意絵の図柄に関する比較考察を行うものである。今回は、『百人一首』七番から一一番までの札を取り上げる。以下、四種のかるたの書誌情報と凡例を簡単に示す。詳細については、前稿を参照されたい。

凡例

- 一、冒頭に、『百人一首』の歌番号を示す。
- 一、かるた四種の影印を列挙し、その下に翻刻本文を示す。
- 一、【字母】では、翻刻の本行本文に即した仮名の字母を示す。漢字や踊り字など、仮名以外の表記には()を付す。
- 一、【古注釈】では、歌意絵を考察する際の着眼点ごとに、古注釈の本文を引用する。主として鳥津忠夫氏・上條彰次氏編著『百人一首古注』(和泉書院、一九八二年二月)を参看・引用する。
- 一、【考察】では、引用した古注釈に依拠しながら、四種のかるたの図柄を比較検討する。

- (1) かるたA 絵変わり百人一首かるた 資料番号：146700558
- (2) かるたB 歌絵百人一首かるた 資料番号：156700225
- (3) かるたC 絵変わり百人一首かるた 資料番号：166700139
- (4) かるたD 歌絵百人一首かるた 資料番号：176700497

七番

[A]

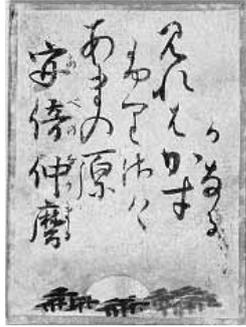


安倍仲麿
かすか
なる
あまのはら
ふりさけ
みれは



みかさの
山に
いて
月かも
し

[B]

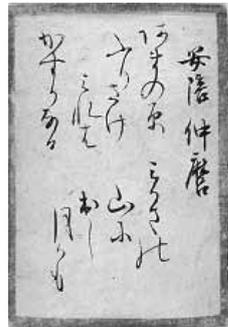


かなる
見れはかす
ふりさけ
あまの原
安倍仲麿



三笠の
山に
月かも
いてし

[C]



安倍仲麿
あまの原
ふりさけ
みれは
かすかなる
みかさの
山に
出し
月かも

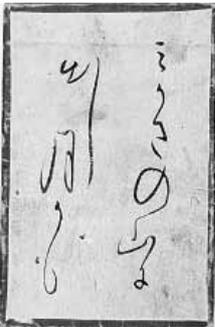


みかさの
山に
いてし
月かも

[D]



安倍仲麿
天の原より
さけ見れは
かすか
なる



みかさの山に
出し
月かも

【字母】

〔A〕(安倍仲麿)

阿万能八良 不利左計三礼八 加春可奈留

三加左乃(山)耳 以天之(月)可毛

〔B〕(安倍仲麿)

安末乃(原) 布里佐介(見) 礼者 加寸可奈留

(三笠)乃(山)耳以天之(月)可毛

〔C〕(安倍仲麿)

阿末乃(原) 不利左計三礼者 加寸可奈留

三可左能(山)尔(出)し(月)可毛

美可左乃(山)耳 以天之(月)可毛

〔D〕(安倍仲麿)

(天)乃(原) 婦利左計(見) 礼八 可須可奈類

三可左乃(山)尔(出)し(月)可毛

【古注釈】

一、『古今集』詞書に拠る唐土の人の餞別する夜の詠という説。

○『経厚抄』

此歌、古今に懇にあり。明州の津にてもろこしの人餞する夜の歌也。

○『米沢抄』

詞書に、唐にもものならはしにつかはしてかへりけるに、明州津にてよめり。

二、唐土の人の餞別する夜の詠という説の否定。

○『異見』

さて、此うた年ごろ吟じ試み侍るに、いかにすれども、かく酒など

のみて、月のおもしろくさし出たるを、見めで、よめるやうの歌とは、えき、なし侍らず。たゞかしこに在て、はるかに大和こひしく思ほえたらん時にこそ、打も出らるべき調なりけれ。されば、もろこしにて月を見てよめる、とある端書のまゝに見おきて、かなふべし。

三、『土左日記』の記述についての言及。

○『宇比麻奈備』

此日記(注……土左日記)の言にてことのみ明らか也。皇朝に帰る船出すべき津よりみれば、そなたの海原より月の出来るが、是ぞ我国の三笠の山に出づる月なるかと、から国よりも思ひおこせたる情いひつくしがたし。

四、明州の月を三笠山の月に重ねて見るという解釈。

○『経厚抄』

帰朝の志故、彼国の月もはや既に三笠の山に出し月なるよと見なす由なり。

○『天理本聞書』

心は、仲丸奈良京の者なれば、只今めいしうの月を見るに、故郷の三笠山手にとる計ちかく思ふよしをよめり。

五、明州の月と三笠山の月は同じ月とは思えないという解釈。

○『新抄』

大ぞらをはるかにみやれば、海の中からおもしろく月がさし出た此月は、我くにて春日にある三笠山から出たが、やっぱりその月も同じ物かと也。大和国は山打かこみたる所、明州はかぎりなき海辺に

て所のさまかはれば月までもおなじからぬやうにてめづらしき趣也。

○『宇比麻奈備』

かもは疑ひのかも也。且此かもてふは、日月のいづこも同じきはしりながら、あまりに遠き他の国にての情ゆゑに、いさゝかうたがひいひたるに、弥あはれふかき也。

【考察】

四種のかるたには、描かれ方はそれぞれ異なるが、いずれも月が描かれる。「A」は、画面右下に、仲磨と思しき人物が、大陸風の髪形と衣の人物とともに岸部に立ち、海を表す波立つ水面を挟んで、画面左上の山に月が出ているという構図である。「C」「D」は、手前に水面（海）を描き、画面奥に山と月を描くが、「C」は水面に二艘の舟の帆を描くところに特徴がある。一方「D」は、月の輪郭がはっきりしない。かるたの表面の経年劣化によるものか。残る「B」は、木々の間、中央あたりに、比較的大きく月の上半分を描く。

「A」の大陸風の人物を描く理由は、『古今集』巻第九羈旅歌、四〇六番の詞書や左注、『土左日記』の記事に拠って明らかである。まず、『古今集』の左注を見よう。

この歌は、むかしなまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるに、あまたのとしをへてえかへりまうでござりけるを、このくにより又つかひまかりいたりけるにたぐひてまうできなむとていでちけるに、めいしうといふ所のうみべにてかのくにの人むまの

はなむけしけり、よるになりて月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめるとなむかたりつたふる（以下、「考察」における歌集の引用は『新編国歌大観』に拠る。）

ここでは、遣唐留学生として唐に渡った仲磨が帰国の途に就くことになったため、明州にて饞別の宴が催されたときに、折からの美しい月を愛でて詠んだ歌という。古注釈においては、『経厚抄』『米沢抄』がこの記述に言及している。その一方、『異見』は、この仲磨歌の詠風から、酒飲みなどする宴席で月を愛でて詠んだ歌とは思えないとし、『古今集』の「もろこしにて月を見てよみける」という詞書どおり、望郷の思いを詠んだ歌と見る。

また、『土左日記』にも、次のような文章に続いて、初句を「青海原」とする仲磨歌が見出される。

廿日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、安倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、廿日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国にかゝる歌をなむ、神代より神も詠ん給び、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しきもある時には詠む」とて、詠めりける歌

（引用は新日本古典文学大系に拠る）

古注釈の中では、とくに『宇比麻奈備』が、この『土左日記』の記事に注目している。

海と思しき水面の向こうに山があり、そこに月が出ているという図柄は、「A」「C」「D」に共通している。明州の海から空に昇った月を見て、三笠山の月に思いを馳せた歌と解すると、これらの要素をもれなく描いた、まずは穏当な構図と言えるであろう。ただし、「C」のみ画面中央に舟の帆を二枚並べて描いている点については、明州が湊であってみれば当然とも言えようが、その一方で、当該歌を、明州から帰国の途に就いた仲麿が、舟上で詠んだものと解していた可能性を想定する余地もありそうに思われる。

「B」の構図では、紙幅の都合があつたにせよ、水辺（海）の要素が全くなく、絵の中央、木々の間に、比較的大きな月が描かれる。これは、仲麿歌を、詠歌状況はひとまず置いて、和歌単独で解すると、自ずと描かれる三笠山に出た月の図柄であろう。また、眼前の月は明州の月であるが、故郷の三笠山の月に見做したと解する『経厚抄』『天理本問書』の記述を基に描かれたと見ることもできようか。とくに後者は、明州の月を目にしたことで、故郷の三笠山の月を「手にとる計ちかく思ふ」歌と解しており、月を比較的大きく描く「B」の図柄に一脈通じるものがある。

なお、『新抄』は、明州と大和との間は遠く隔てた距離があり、また月は、明州では海から出るが、大和では三笠山から出て、情景が全く異なることから、同じ月とは思えない、とする。また、『宇比麻奈備』も、明州と大和との距離の遠さから、月は同じ月であることは承知しているものの、それを疑う心情を「弥あはれふかき」と評価している。

八番

〔A〕

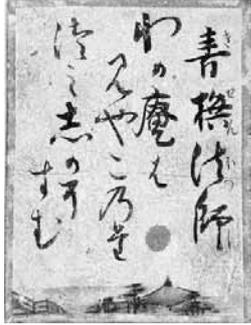


喜撰法師
わかいほは
みやこの
たつみ
し
かそすむ



よを
うち
山と
いふ
人は
也

〔B〕

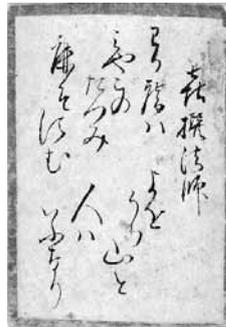


喜撰法師
わか庵は
みやこのた
つみしかそ
すむ



いふなり
世を宇治
山と人は

〔C〕



喜撰法師
わか庵は
みやこの
たつみ
鹿そすむ
よを
うち
山と
人は
いふなり

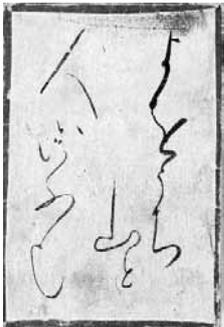


世を
うち
山と
人は
いふなり

〔D〕



喜撰法師
わか庵は
都の
たつみ
しかそ
すむ



よをうち
山と
人はいふ也

【字母】

〔A〕(喜撰法師)

和可以本八 三也己乃多川三 之可曾春武

与越字知(山)止(人)八以不(也)

〔B〕(喜撰法師)

和可(庵)者 見也己乃堂徒三 志可曾寸武

(世)遠(宇治山)止(人)者以不奈里

〔C〕(喜撰法師)

王可(庵)八 三也己乃太川美(鹿)曾須武

与遠字知(山)止(人)八以不奈利

(世)越字知(山)止(人)八以不奈利

〔D〕(喜撰法師)

王可(庵)八(都)乃多川三 之可曾春武

与遠字知(山)止(人)八以不(也)

【古注釈】

一、「うち山」の解釈。

○『経厚抄』

世憂山と人はきらへども我は住得たりと云心也。此巽と云字に對して見時、宇治山のうと云字を東の方の卯の字に當て、人は卯の方の様に云と憂の字に寄て讀也。是古歌の躰なり。昔は菟道と書て、うちと讀也。

○『新抄』

我庵は都の辰巳の宇治山にて、かやうに隱遁してすめば世の中に何

もうき事はなきを、うき世ぞうき世ぞと人はいふ也、といへるなるべし。又我庵は都の辰巳の宇治山にかやうに引こもりて住てをるを、世の中を憂き物におもひて隱遁したと人はいふ也、とよめる事もあるべし。

○『宗祇抄』

世をうき山といへども我は住えたる様の心也。

○『古注』

我庵は都よりたつみにあたりてすむ、といへり。人は世にうき山といふなり。しかれども、我はすみなれてすみよきといへる也。

○『天理本聞書』

我は天然爰にすむを、山の名が宇治なれば世を憂とてこゝにすむやと人のおもわんと也。

○『三奥抄』

うたの心は、わが住所は都の辰巳ちかく、他人は山の名を宇治と名付て住者もなければ、我はかく住なしたりといふ心也。

○『改観抄』

我庵はやがて都のたつみの方遠からねど、山を便りにかく靜に住得たり。世をうち山と名付て、人はえすむまじき所といへどもとなり。

○『字比麻奈備』

是は、われ世の中をうしと思ふ故に、のがれ来てこゝに住めり、即こゝを世をうち山と人のいふぞといへり。

○『異見』

我庵はやがて都のたつみにして、世をうちとのみ常にも人のいひならず山なり。かくもうき山にわびつゝ、ぞしかすめるは、といへり。

こは事の便に人のもとなどへ歎きつはかしたるなるべし。

二、「しかぞすむ」の解釈

○『経厚抄』

しかぞとは、さぞと云心なり。さも住物をと云、三の句也。

○『米沢抄小書』

しかぞ住は、然べく思て住と也。

○『天理本聞書』

しかぞすむとはしかうして住也。心は自然に住と云儀、又は住えたと云也。

○『色紙和歌』

鹿ぞすむとは、さぞすむとのことば也。

【考察】

唯一人物が描かれている「A」は、背景に山々が描かれている。その手前の線は、宇治川の流れを表しているであろう。比較的激しい流れのように見える。そうすると、その川を渡す橋は宇治橋で、擬宝珠もふたつはつきりと描かれている。画面左の建物は庵と考えられ、喜撰法師と思われる僧が、縁側から、外の橋の方を見ている。

次に「B」では、庵と、その庵の周りに生い茂った木々が描かれる。その画面左の橋は、欄干と独特の「三の間」の形状から、宇治橋であることがわかる。「C」では、背後に葉をつけた木々のある庵が描かれ、その庵の縁側から画面左下に向かって三つの飛び石が描かれている。「D」では、山間にある庵と、その庵に続く道が描かれており、全体の構図として奥行きがある。「C」に比して遠景からの絵であり、山奥の

庵の雰囲気がある。

「A」は、山間というよりは、宇治川や宇治橋近くの庵を思わせる。そこが（宇治）山であるということよりも、「都のたつみ」にある「宇治」という土地であることを明示した図柄である。また「B」も、宇治橋の特徴である「三の間」をはっきりと描くことで、山間の木々に囲まれた庵を描きながら、象徴的にそこが宇治であることを示す。一方、「C」「D」は、図柄に宇治であることは表されず、庵が山間にあることに主眼を置いた図柄である。なお、「A」と「C」は庵を比較的近くから描いているが、「D」は、より広い視野で周囲を山で囲まれた庵を描いており、喜撰の庵が「隠遁」（新抄）の場所であり、「山を便りにかく静に住得たり」（改観抄）という俗世から隔絶されたたたまいが表現されている。なお、「C」の歌では、「しかぞすむ」の「しか」に「鹿」という漢字を当てており、『色紙和歌』が「鹿ぞすむとは、……」と表記している点にも留意されるが、鹿を描く札は、今回取り上げた四種の中からは見出されない。

九番

[A]

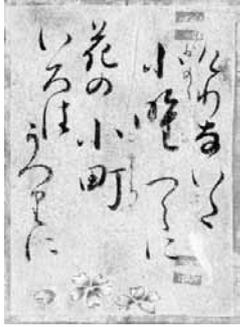


小野小町
はなのいろは
うつりに
いたけりな
つらに



なかめ
せし
わか身
まに
にふる

[B]

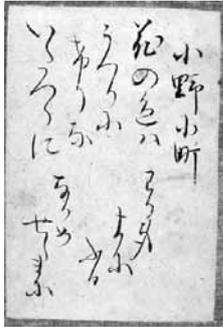


けりないた
小野 つらに
花の 小町
いろは
うつりに



わかみ まに
よに
ふるな
かめせし

[C]



小野小町
花の色は わか身
うつりに よに
けりな ふる
いたつらに なかめ
せしまに



我身よにふる
なかめ
せし
まに

[D]



小野小町
花の色は
移りに
けりな
いたつらに



わかみ 世に
ふる
なかめせし
まに

【字母】

〔A〕（小野小町）

者奈能以呂八 宇川利尔介利奈 以多川良耳
和可（身）（世） 尔不留 奈可女勢之万耳

〔B〕（小野小町）

（花） 乃以呂波 宇川里仁介利奈 以多川良仁
和可美与仁不留 那可免世之末仁

〔C〕（小野小町）

（花） 乃（色） 八 宇川利尔希利奈 以多川良仁
王可（身）与尔不留 奈可女世之末尔
（我身）与尔婦留 奈可女世之末尔

〔D〕（小野小町）

（花） 乃（色） 八（移） 利尔介梨那 以多津良耳
王可三（世） 尔不留 奈可女世之末尔

【古注釈】

一、「花の色は移りにけりな」の解釈。

○『新抄』

此歌、花は一首のしたてにて、趣意は述懐也。古今集に春の部に
りしになづみて、落花をおもくとくは強説なり。

○『天理本聞書』

歌の道は、春の花を見に行かんとすれば長雨する内に徒にその色お
とろへてかなしきと云心也。

○『色紙和歌』

春の花のいろかふかきも、風雨のをとろへあはざる躰也、……

○『幽斎抄』

此歌には表裏の説あり。（中略）裏の説は身のをとろへも我とはし
らぬもの也。花のをとろへをみて、我身もかくうつりてこそ有らめ
と思ひやる義也。

○『宇比麻奈備』

この歌の上に、散花をなにかうらみん世の中に我身もとくにあらん
ものかは、てふをつらねしかば、撰者の心さぞあるべし。

○『異見』

此歌、落花の中にあれば、うつりにけりは、たゞ散かたにもとらる
れど、猶色とあらんには、うつろひあせたる方に見るべきか。さる
中に散こともこもるべし。……此歌の上に、ちる花を何か恨みん世
中に我身もとくにあらんものかは、てふをつらねしかば、撰者の
こゝろさぞあるべし、といへるは非也。

二、「花の色」に小町の容色を重ねるとい説。

○『経厚抄』

……徒なる世のわざ引れて、今年もかく花を過すよと、身を恥た
る歌也。

○『新抄』

何一つのおもひでもなく、むだに年のよるをなげきて、うつとりと
してをるうちに、花のやうで有た姿もうつろひおとろへたぞなア
と、打なげきたる趣なり。

○『宗祇抄』

下の心は、小町が我身のさかりのおとろへ行様をよめり。

○『米沢抄』

心は、わがはなやかにしさまとにかくに過せしひまに、いたづらに老けるよと歎きし也。

○『天理本聞書』

底の心は、花の色とは小町が美麗成容色のおとろふる也。身の盛なる比も徒に世にふる詠とは、世中男女の色欲さまざまに心をかけて月日のうつり、身のをとろへ行をしらざる所をかなしむ也。

○『宇比麻奈備』

咲にし日よりめかれずのみあらんと思ひし花を、世にふればいたづらに物おもひをして、よしなきながめをしつゝをる間に、かくうつろひにけるよとなげきたり。……(中略) またわが容なまのをとろへをそへたりといふも、しか也。(読み仮名筆者)。

三、「花の色」に小町の容色を重ねるといふ説の否定。

○『三奥抄』

さて小町がうたにおもてうらの説有などいふ事、不用。只花になくさむべき春を、いたづらに花をばながめずして世にふるながめに過したりといふ儀也。霖雨に又花のうつろふ心をそへたり。

○『異見』

初学云、わが容のおとろへをそへたりといふもしか也。……花のうつりを歎かん中に、また、我かたちのおとろへをも思ひこめて、よそへいふ事あるべき事ならんや。又、かたちのうへを歎くとせば、鏡などにさしむかはずしては、移りにけりなどいふ調にかなふべからず。もしかたちのおとろへを見て歎きたらん歌とせば、又、花はかたちのよそへものとなりて、今さしむかへる花とは見がたきぞか

し。もとより花の色はといふより、しかよそへたる調には聞えざる也。

四、「眺め」に「長雨」を掛けるという説。

○『経厚抄』

世にふるながめと云に、霖雨の心もちて、我徒に花を過ば、霖の花をくたすにことならずと云心のある也。

○『宗祇抄』

春いたりて花の咲べき比は、かならず尋みるべき心を思きぬるに、徒にただ我身の世にふるまじはりの隙なきに打過し打過しするに、長雨さへふりぬれば、はや花のうつろひぬるなどを打歎てふりにけりなどいへる也

○『天理本聞書』

物の心光陰を惜。此詠は歎く心也。詠長雨を兼て心得也。

○『幽斎抄』

ながめせし間は只ながむる義也。但為氏卿ながめを長雨と雨をそへてふかく見よと申されしと也。

○『三奥抄』

ながめとは、心のなぐさめがたき時は空をながめて物思ふていをわぶ。それを春の長雨にかけて世にふるといふ詞も両事を兼たる也。

○『宇比麻奈備』

咲にし日よりめかれずのみあらんと思ひし花を、世にふればいたづらに物おもひをして、よしなきながめをしつゝをる間に、かくうつろひにけるよとなげきたり。且花はことに雨にうつろふ物なれば、をりからのなが雨をもて詞をなせり。

五、「眺め」に「長雨」を掛けるという説の否定。

○『龍吟明訣抄』

御説云、ながめせしまとは詠て居たる間といふことなり。一説に、ながめをながめといふ説は悪し。不可用。後撰に 春立てわが身ふりぬるながめには人の心の花もちりけり、此歌にて考へしとなり。これ此歌の注になるなり。

【考察】

四種のかるたのうち、花（桜）が描かれるという点で「A」「B」「D」は共通し、「C」のみ全く異なる図柄である。

「A」のかるたは、屋敷の簀子に立つ小野小町と思しき一人の女性が、庭の桜を見ている場面で、桜の木の下の地面には、散り落ちた花びらがちらちらと見える。女性の視線は、樹下の落花に注がれているようである。また「B」の絵は、中央に、一輪の桜の花のかたちに配された花びら五枚、その右側に、花を横から見た絵で花びら四枚、左側に花びら一枚が描かれる。さらに「D」は、三、四本の枝に赤系の顔料を平面に載せ、そこに白で複数の点を描くことで、桜の花を描く。散った花びらは見られない。これらに対して、「C」では、几帳と鏡台が描かれている。

「花の色」が「移る」という状況は、「色の衰え（退色）」（天理本聞書・色紙和歌・幽斎抄）と見る説の他、「落花（散る花）」（新抄・宇比麻奈備）と解する説がある。そのような中で、『異見』は、「色が褪せる」と解するべきかとしながらも、その場合、「花が散る」ことも含まれるという折衷案を示している。かるた「A」は桜の木に花は咲いているが、木の下に散った花びらが描かれており、また「B」も、花の部分だけしか描かれなものの、やはり散った花びらのさまを描いたものと解するべきであろう。

一方、「D」は、散った花びらが描かれていないことから推すと、少なくとも「散る花」に主眼を置いた図柄ではないということは言えるであろう。

さて、「花の色」は、桜の花を指すだけではなく、作者自分の容色の意も重ねられていると指摘する古注釈が多い。「趣意は述懐」（新抄）であって、「世に経る」我が身の「姿」「さかり」「容色」の「おとろへ」（新抄・宗祇抄・天理本聞書）を詠んでおり、「いたづらに老けるよ」（米沢抄）と「恥たる歌」（経厚抄）と解するのである。ただし、『三奥抄』はこの説を採らず、また『異見』も、「初学」の説を引きながらこれを否定する。すなわち、容色の衰えを歎くのなら、「鏡などにさしむかはらずしては、移りにけりなといふ調に」合わないはずであり、「さしむかへる花」の歌とは解せなくなってしまうのである。この小町歌は、「花をながめて」（正保版本）歌仙家集『小町集』一番）という詞書でも収められており、歌の調べや詠歌状況から疑義を呈したものと考えられる。とすると、几帳と鏡台を描く「C」の図柄は、少なくとも『三奥抄』『異見』の説からは描き得ない。『幽斎抄』のいう「表裏の説」のうちの「裏の説」によって描かれた絵ということができよう。「ながめ」について、「眺め」は「長雨」の掛詞であることが多くの注釈書で指摘されている。だが、『龍吟明訣抄』では、この掛詞を認めない。「春立ちてわが身ふりぬるながめには人の心の花もちりけり」（後撰集・巻第一・春歌下・二一・よみ人しらず・ひとにわすられて侍りけるころ、雨のやまずふりければ）は、その根拠の提示であろうが、やはりこの『後撰集』の歌の場合も「眺め」「長雨」の掛詞と解するのが穏当であろう。四種のかるたの中では、桜の木の枝に咲く花のまわりに白い顔料が薄く塗られている「D」の絵がやや気になるが、明確に雨を描いていると判断できるものは見当たらない。

[A]



蝉丸
わ
かれて
は
これや
この
かへるも
ゆくも



しるも
しらぬも
あふ
せ
さ
き
かの

[B]

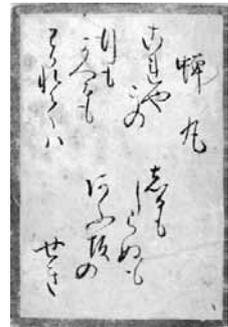


蝉丸
これやこの
ゆくもかへるも
わかれては



しるも
あふ
ぬも
さかの
せき

[C]



蝉丸
これや
この
しるも
しらぬも
あふ坂
行も
かへるも
わかれては
せきの



しるもし
らぬも
あふ坂
の
関

[D]



蝉丸
これやこの
行も
かえるも
わかれては



しるも
しらぬも
あふ坂の関

【字母】

〔A〕（蟬丸）

古連也己乃 由久毛可部留毛 王可連天八

志留毛之良奴毛 安不左可乃世幾

〔B〕（蟬丸）

己礼也己乃 由久毛可部留毛 和可礼天八

志留毛之良奴毛 安不左可乃世幾

〔C〕（蟬丸）

古連也己乃（行）毛可部留毛 王可礼天八

志留毛之良奴毛 阿不（坂）乃世幾

志留毛之良奴毛 阿不（坂）乃（関）

〔D〕（蟬丸）

古連也己乃（行）毛可衣留毛 王可礼天八

志留毛之良奴母 安不（坂）乃（関）

【古注釈】

一、「六道輪廻」の説。

○『米沢抄』

明くれ関の戸をゆき帰るありさまは、人間の六道に輪廻して生れかはり死かはりめぐる躰に異ならぬ処をいはむとて、是やこのゆくもかへるもといふとぞ。

○『天理本聞書』

此躰を能々見るに、則五道六道の流転のちまたを只これや此逢坂の関をいかでのがれんと云心也。是則三世十界を目前に見つくしたる

歌也。

二、「六道輪廻」の説の否定。

○『経厚抄』

此歌を余ふかくいはんとて、六道輪廻の作法をよめるなどあるは、ことごと敷会尺なるべし。

三、「会者定離」の説。

○『宗祇抄』

面は旅客の往来のさまの儀也。下の心は会者定離の心なり。

○『雑談』

是や此といふ五文字は、しかと落つきて云たる五文字也。下の心は、会者定離のこゝろにて、往も還るもと云は、生死流転をまぬがれがたきをいふ也。

四、「会者定離」の説の否定。

○『三奥抄』

此うたの心を会者定離の心有といふは、ことはり違却せり。不可用。

○『改観抄』

古抄に、会者定離の心といふは、発句と結句との首尾に違却せり。

五、「愛別離苦」の説。

○『経厚抄』

只世上の理にて愛別離苦の趣ばかりにても其心は甚深なるべし。

○『色紙和歌』

この歌の心は、人間の八句といふ心（ハツク）をよめり。生老病死の四苦、あいべつりく・おんぞうゑ苦・求不得苦・おんじゃうく五く、この八く也。その中にこの歌は愛別離苦をよみあらはし、しかも八苦をこ

めたる也。

六、詠歌状況に対する疑義

○『異見』

門人位田義比云、この歌は、旅ゆく人のよめりしならん。そこに庵室つくりて常に住をる人の、これやこのとはいふべくもあらじ、といへり。げにさることに侍り。此詩は常に聞おける事などを、今現に見て、おもひあはするやうの意なれば、此端詞かなひ侍らぬにや。関に庵室を作りてといふより、人を見てとあるをつらつら考るに、このうへもいぶかしく、其書さまもいと拙きこゝちす。

【考察】

四種のかるたには、いずれも「逢坂の関」が描かれており、関の形状もほぼ同じようであるが、その周囲の風景が異なっている。「A」の画面右上に描かれる建物は、蟬丸の住む庵であろう。その前から画面左下に道が延び、関を通って右側に曲がると、その道を、菅笠をかぶり杖を手にした旅人らしい人物が歩いている姿が描かれる。道幅と平行に描かれた線は、道が坂になっていることを示すものである。そして、蟬丸らしき法体の人物が、画面左端から旅人の方へ視線を送っている。また「B」は、木で作られた関と柵が象徴的に描かれている。「C」も「B」と同様の関と柵だが、画面左上の関と柵のあたりに木々が描かれ、一本の木は関の高さよりもかなり高い。道は、関から画面右下の緑に塗られた山の中を、曲がりながら通っている。「D」は、画面左上の山の頂付近にある関から画面下方へ、曲がった道が描かれる。「A」と同じく道幅と平行に描かれた線は、やはり坂になっていることを示す。四種のか

るたの中では、もっとも遠景である。

古注釈では、この蟬丸歌について、「六道輪廻」「会者定離」「愛別離苦」といった解釈や、それを否定する立場などが述べられているが、四種のかるたの歌意絵には直接関わってこない。「関」そのものを描くことで、この歌の絵画化はほぼ達せられていると言つてよいであろう。

なお、「A」の図柄は、庵らしき建物が描かれ、法体の人物（蟬丸）が関を通つていく旅人の方を眺めるところから、この蟬丸歌が載る『後撰集』の詞書「相坂の関に庵室をつくりてすみ侍りけるに、ゆきかふ人を見て」（巻第十五・雑一・一〇八九）に拠るところが大きいと見られる。この点において、『異見』が「門人位田義比云」として、この詞書の状況は当該歌に適合しないと主張とは一線を画すであろう。

一二番

[A]

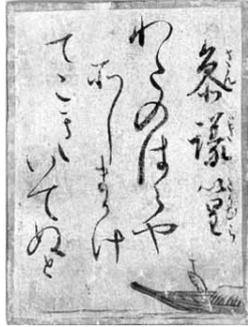


参議篁
こき
出ぬと
わたのはら
やそ
かけて
しま



人には
あま つけ
の よ
つり
ふね

[B]

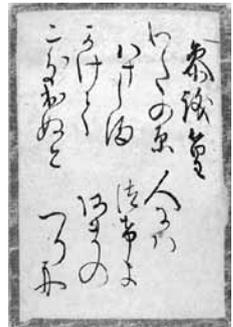


参議篁
わたのはらや
そしまかけ
てこき
いてぬと



あまのつり
つけよ
ふね
ひとには

[C]



参議篁
わたの原 人には
八十しま つけよ
かけて
こき出ぬと
あまの
つり舟



人にはつけよ
あまの
つり
舟

[D]



参議篁
わたのはら
八十嶋かけ
て漕いてぬと



ひとには
あまの
告よ
釣ふね

【字母】

〔A〕(参議篁)

和多能八良 也曾之万可計天 己幾(出) 奴止
(人) 耳八川計与 安万乃川利不年

〔B〕(参議篁)

和多乃波良 也所之末可計天 己幾以天奴止
飛止仁盤川計与 安万能徒利不年

〔C〕(参議篁)

和多乃(原) (八十) 之満可計天 己支(出) 奴止
(人) 尔八徒希与 阿末乃川利(舟)
(人) 尔八徒介与 阿末乃川利(舟)

〔D〕(参議篁)

和田乃者良 (八十嶋) 閑遺天 (漕) 以天奴止
悲止尔八(告) 与 安万乃(釣) 不年

【古注釈】

一、「あまのつりぶね」に呼び掛けたとする解釈。

○『経厚抄』

人にはつげよとは、宮中の人をさして云。左遷の舟なれば、便舟も
なきまゝに、海士の釣舟と喚かけたるが余情無極由古来風躰抄にも
かけり。

○『新抄』

限もしらず広々とした海をいくらかもある嶋々の方へむけてのり出し
て行たと、京の我家の人に告てくれよ、蟹の釣舟よと也。

○『色紙和歌』

かゝる物うきありさまを、あまのつりぶねもみやこの人にかたりつ
げよとうれうる心也。

○『幽斎抄』

我思ひの切なるほどを知人にもつたへまほしきを、さりながら、た
とひ朋友ありとも、罪ある身なれば其人とさしてはいひがたし。又
只今我に対する物は、釣舟ばかり也。仍大やうに人にはつげよとい
へり。心なき釣舟に人にはつげよといへる心、尤感ふかし。

○『異見』

行末数しらぬ島々をかけて、海原はるかに漕出たりと、我思ふ人に
は告よ、この釣する舟よ、と難波わたりこゝらうかべる釣舟にあつ
らへ残したる也。……今こぎはなれさすらへ行んを、蟹舟のおのづ
から見やらんなれば、其見んずらんさまを人につげよといふ也。門
人阪上寛云、……こゝろなき釣舟にいひかけたるが哀に聞ゆるなり、
といへり。改観云、……(『伊勢物語』「みるめかる」を引いて)こ
れをまことの蟹と意得たらんだにひが事なるに、まして釣舟とつゞ
けたるにまどひて、対していふべき人もなければ釣舟にむかひてい
へるさま、哀なるよし釈するは、いふにたらぬ事也云々。初学に
も、あまの釣舟とは、京へ言負せてかへす人を其所のものによそへ
いふのみ。(『伊勢物語』「みるめかる」を引いて)といへるにひとし、
といへり。此説非也。(中略)今はわたの原といふより、釣舟とい
ふまで実事にて、よせまうけたるとは、事のうへ別也。たとひ言伝
やるべき誰はありとも、はかなき釣舟にいへるぞかへりて歌の心な
りける。もとより、島々遠く漕行を見おくらんものは釣舟ならで誰

ならん、漕出ぬといひて釣舟とうけたる語調、いまは同じ波間のは

かなき友と見て、したしみいへるがあはれに聞ゆる也。（中略）古

抄に対して、いふべき人もなければ釣舟にむかひて云るさま哀也、

といへるを、いふにたらぬ事也と難じたるも中々也。おくりの人も

有べからんに対して、いふべき人なしとまでいへるは過たれど、は

かなき釣舟にいへるが、勅勘の身のたより失へる心見えて、殊さら

にあはれ也とは、猶いひつべし。只こゝろなき釣舟にむかひていは

んは、うきたる事とおもふべからず。およそ花にうらみ鳥にかこつ

はせまれる情のおのづからなるしわざにて、大かたのことわりもて

は解なし難き限にこそ侍れ。

二、「あまのつりぶね」は比喩とする解釈。

○『宗祇抄』

……、我思の切なるをあまの釣舟に云付る也。故郷の人に誰にもか
くこそいへといふ心也。故郷の人をつり舟によそへいへるなり。

○『三奥抄』

けふこゝに舟たちしたりといふ事を、京に思ふ人にいひやるを、海
辺よりのつかひなれば海士のつり舟にならずらへたる也。これをまこ
との海士のつり舟に心得るは、ひがごとなり。

○『改観抄』

只今舟だちするなにはより、此嶋々あるにはあらず。ひろく末をか
けていへり。（中略）是をまことにあまと心得たらんだに僻事なる
に、まして釣舟とつゞけたるに迷ひて、対していふべき人もなけれ
ば、釣舟に向ひていへるさまあはれなるよしに釈せるは、いふにた
らぬ事なり。

三、「八十嶋」の解釈。

○『経厚抄』

八十嶋とは攝津にも有ども只多嶋也。

○『新抄』

限もしらず広々とした海をいくらかもある嶋々の方へむけてのり出し
て行たと、……

○『宗祇抄』

八十嶋かけてとは、あらぬ境へ行此の世の外の心する也。

○『米沢抄小書』

多クノ嶋ノ中へ流行ト申セト也。

○『色紙和歌』

おきの国まではるか海路なれば、おほくのしまをこぎすぎてわた
り行心也。

○『三奥抄』

八十嶋はおほくの嶋を云。遠流身として、隠岐の国までの海路をか
けて思へば、いくらの嶋々をかふべきと思ふ心也。

○『改観抄』

只今舟だちするなにはより、此嶋々あるにはあらず。ひろく末をか
けていへり。

○『異見』

行末数しらぬ島々をかけて、海原はるかに漕出たりと、我思ふ人に
は告よ、この釣する舟よ、と難波わたりこゝらうかべる釣舟にあつ
らへ残したる也。隠岐の島をかけて漕わたるあひだに、なほ経なん
海上の島々をこめて八十嶋といへり。

【考察】

「A」の札には、ふたつの島と舟二艘がある。島を囲むように、また、舟底の辺りに、波を表す山形の線が描かれ、水面が波立っていることがわかる。画面奥にある島は薄緑に彩色され、木々が描かれる。画面右側にある帆を掛けた舟は、篋の乗る舟であろう。一方、画面左側の舟はそれより小さく、笠を被り蓑を付けた人物が櫓を漕いでいる。足元の円筒状のものは、魚籠であろうか。漁夫の釣舟である。「B」では、薄青色に塗られた背景の中、画面下方に引かれた水平の線が、水面を表している。画面右側には、帆先を左に向けた舟が半身だけ描かれる。その上には笠と棒状のものがあるが、笠を被って櫓を漕いでいるさまであろうか、漁夫の姿と見られる。その他、舟の上には、筵のようなものがある。「C」は、青色の濃淡を使い分けて水面が波立つさまが描かれている。画面左に舳先を右に向けた一艘の舟がある。そこには、笠を被って茶色の蓑を着た人物が舳先に立ち、左手に松明を持っている。また、明確には見て取りにくいのが、前述の立つ波の描写とは異なる曲線が、松明の下の方と、この人物の右手と思しき箇所から出ている。あるいは網を打つさまを描いたものか。いずれにせよ、漁夫が漁をしている様子である。舟上にある箱のようなものも、魚籠の役を果たす具か。さらに「D」も、背景を薄青色に塗り、濃淡をつけて水面を表している。画面右側には木々が生えている島、あるいは半島がある。画面左上には、不明瞭ながら、舟が二艘描かれている。

この篋歌を絵画化しようとするとき、まず着目されるのは「あまのつりぶね」であろう。古注釈を繙くと、この「あまのつりぶね」が比喻表現であるという説（宗祇抄・三奥抄・改観抄）があり、「見るめかる

方やいづこそ棹さして我に教へよあまの釣舟」（伊勢物語・第七十段・一二九・男・むかし、男、狩の使より帰り来けるに、大淀のわたりに宿りて、齋宮のわらははべにいひかけける）を引いて論じられることがあるが、やはりこの篋歌の絵画化には、「あまのつりぶね」は欠かせまい。さらに、「A」と「C」、また「B」にもわずかに、漁夫の姿も見え、それが海人の乗る舟であることを表している。

また、島らしきものが描かれているのが「A」と「D」である。「D」は先に指摘したとおり半島かもしれないが、「A」の島々は「八十島」を表すと考えられる。「八十島」は、古注釈においては、一様に「多くの島」と解する。この篋歌が載る『古今集』の詞書「おきのくににながされける時に舟にのりていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける」（巻第九・羈旅歌・四〇七）に拠って、隠岐国までの海路の遠さに言及する『三奥抄』『異見』もある。なお、「八十島」は「攝津にも有」（経厚抄）と指摘するものもあるが、『改観抄』は、船出する難波の湊からすでに島々があるわけではないと述べる。「八十島かけて」の意を汲んでのことであろう。そうすると、かるたの絵が篋の出航直後の情景を描いているとするならば、島を描かない「B」「C」の図柄の方が無難とも言えそうではある。だが、歌意絵が札に占める大きさや、対象物などのくらの近さから描くかといった視点の設定のしかたによって、島を描かなかった、あるいは描けなかつた可能性を考慮する必要もあるだろう。そうすると「A」は、隠岐国までの前途をも一枚の絵に描き込んだと捉え得る。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における二〇一八年度秋学期の授業「日本古典文学情報特論2」において採り上げた内容の一部である。大久保孝晃（八番・一一番）・伍昆（二〇番）・胡淑雲（九番）が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、七番歌を含めて、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究、二〇一九～二〇二二年度）、および「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一九年度）の一環として、さらに検討を加えた。